

セッション3<第3分科会>記録

重い障害がある子どもの実態把握、教育目標と内容の設定、評価等に関する情報パッケージ「ぱれっと (PALETTE) の提案」～本人主体の個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成と活用～

研究報告

- 全体進行 大崎 博史 (国立特別支援教育総合研究所主任研究員)
情報パッケージ「ぱれっと (PALETTE)」の概要
齊藤由美子 (国立特別支援教育総合研究所主任研究員)
小澤 至賢 (国立特別支援教育総合研究所主任研究員)
分藤 賢之 氏 (文部科学省特別支援教育調査官・研究協力者)

実践報告

- 実践報告① 橋 紀子 氏 (香川県立高松養護学校 教諭・研究協力機関)
実践報告② 釧持 弥貴 氏 (奈良県立ろう学校 教諭・研究協力機関)

意見交換

- フロアと報告者による意見交換
まとめ 齊藤 由美子 (国立特別支援教育総合研究所主任研究員)

<話題提供の概要>

第3分科会では、重い障害がある子どもの教育計画の立案と実施に資する情報パッケージとして作成された「ぱれっと (PALETTE)」(試案)(以後「ぱれっと」と表記)の概要と研究協力機関における活用の実績が紹介され、その意義について協議が行われた。まず、司会の大崎(特総研)より、本分科会のタイムスケジュールが説明され、6名の登壇者が紹介された。次に、研究分担者より研究報告が行われた。齊藤(特総研・研究代表者)からは、本分科会の目的、「ぱれっと」作成にあたっての背景や課題、対象とする子ども、研究の目的と方法、「ぱれっと」の特長、などが紹介された。小澤(特総研)からは、「ぱれっと」の具体的な項目と構成、「ぱれっと」の軸となる基本的な考え方(「本人中心の考え方<Person-Centered Planning>」)、などが解説された。分藤(文部科学省・研究協力者)からは、「ぱれっと」と学習指導要領等との関連性、重度重複障害児教育を進めるに当たっての「ぱれっと」の有用性及び個別の教育支援計画、個別の指導計画、学習指導、キャリア教育などの具体的な実践が充実していく可能性などが述べられた。続いて、研究協力機関2校より実践報告が行われた。香川県立高松養護学校の橋教諭からは、「ぱれっと」のうち、「I-1. 一日の生活の流れに関するアセスメント」、「I-8. 興味関心に関するアセスメント」を利用した実践が紹介された。「ぱれっと」のアセスメントによる3つ実践事例の

結果から、「ぱれっと」が個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成、保護者との連携などにとって有効であることが報告された。奈良県立ろう学校の釦持教諭からは、聴覚特別支援学校の乳児相談部門における専門性の向上のために「ぱれっと」を活用した実践例が紹介された。「ぱれっと」のうち、「Ⅱ－１．保護者の理解と本人受容の視点」、「Ⅱ－２．家族のエンパワメント」の２項目について２名の教員で読み合わせをした結果、「ぱれっと」が、保護者や家族との連携に対する教員の意識を変化させたり、教員の基本的な姿勢などを考えるきっかけを与えたりする効果があることが報告された。（以上、要項 p 17 を参照）

<話題提供者同士の議論>

齊藤：「ぱれっと」の実態把握には、発達の視点以外のたくさんの視点があるが、この意義についてどう考えるか？

橘氏：いろいろな視点から子どもの姿を知ることが大事にしている。「ぱれっと」の行動観察の観点を参考にすることで、例えば、「聴いている時には、動きが少なくなっていること」など、コミュニケーションの手がかりを知ることができ、それを保護者や関係者に伝えることができた。いろいろな視点から子どもの姿をとらえ、子どもにかかわる関係者同士のコミュニケーションを円滑にはかる、それが「ぱれっと」の本質ではないか。

齊藤：（重度重複障害の子どもの教育については）肢体不自由の特別支援学校がメインで語られがちだが、聴覚の特別支援学校で「ぱれっと」を使う意義は何か？

釦持氏：（聴覚障害の特別支援学校においても）聴覚・言語のことだけを考えているわけではないが、無意識にそこに焦点をあててしまいがちになる。（学校の中に）重複障害担当者の会議があるが、そこで「ぱれっと」の紹介をしたところ、その中のさまざまな項目、例えば、「体調管理」、「興味関心」、「子どもの一日の流れ」などの視点が、意外と見落とされているという意見があった。「ぱれっと」を利用することにより、その子が一日の流れをどう過ごしているのかという原点に立ち返ることが可能になる。

※齊藤より、「ぱれっと」を活用した他の研究協力校の事例の紹介、活用の目的（研修など）、うまく活用する要因（読むだけでなく自らの実践について振り返ったり考えたりするツールとして使うこと、必要な項目をわかりやすく説明してくれるメンター的な教員の存在）、などが述べられた。

<参加者との質疑応答>

参加者：個別の指導計画において、長期目標、短期目標の立て方が教員間で異なることが課題になっているが、その課題を解決するために「ぱれっと」を使いたい。今日の釦持先生の話聞いて、教員が同じ考えをもって取り組んでいくために「ぱれっと」の項目を小グループで話し合っていく方法が有効と感じた。

参加者：高等部重複クラス担任。「ぱれっと」をぜひ活用したい。教員８名中５人が臨任の状況の中で、教員間でこういった視点でみるか、ここは重要だということ共有すること

が大事だと思っている。「ぱれっと」抜粋版の中で、「ここだよ」と思えたところがたくさんあった。

参加者：指導内容や目標が毎年同じになっていくことが悩みとしてある。「ぱれっと」の各項目と構成（配布 p144）の中で、このような課題はどう捉えられているのか。

小澤：「ぱれっと」の各項目と構成（p144）の中では、「Ⅲ．目標設定と教育内容」の部分が参考になる。

参加者：小学部、中学部で目標が似かよってくることがある。キャリア教育の視点から、目指す姿を共有して連続性のある指導を進めていくことが大事だと思うが、それに「ぱれっと」が活用できると思う。

参加者：目標が具体性に欠けると同じ目標になってしまう。「ぱれっと」には、参考になるページがたくさんある。

分藤氏：「ぱれっと」には、目標設定の仕方、評価の観点、尺度の明確化という視点がある。観点別評価の観点から、その子がどう思考し、判断し、表現するか、ということを見ていくとその子の具体的な目標になってつながっていくのではないか。こういった視点は意外と見落とされがち。

<まとめ>

齊藤：子どものもっている力に大きな変化はなくても、子どもの現在の家庭や地域での生活、将来の生活をイメージすると、子どもが、どんな場所で、だれの支援を受けながら、どんなこと実現するためにその力を使えるようにするのか、という広がりや指導目標や内容にも具体的に反映されてくるのではないか。学校にいる人が基本となる考え方を共有していくことが大事。「ぱれっと」を共有することで、一人の専門性が1 m高まるのではなく、みんなで一緒に10 cm高まることを目指している。「ぱれっと」は、それを進めていくツールだと考えている。